

# HP Performance Agent

HP-UX 11i v1 以降

ソフトウェア バージョン : 4.70

---

## インストール、設定ガイド

Manufacturing Part Number: B4967-99002

本書の発行日: 2007 年 9 月

ソフトウェアのリリース日: 2007 年 9 月



## ご注意

### 保証書

HP 製品およびサービスに対する保証は、それらの製品およびサービスに付属している保証規定に明記された条項に限られます。本書に記載された内容は、追加の保証を規定するものではありません。HP は、本書の技術的および編集上の誤りや不備について、その責任を負わないものとします。

この情報は予告なしに変更されることがあります。

### 権利の制限

本書で取り扱っているコンピュータソフトウェアは秘密情報であり、その保有、使用、または複製には、HP から使用許諾を得る必要があります。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商業用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアドキュメンテーション、および商業用製品の技術データは、ベンダ標準の商業用ライセンスのもとで、米国政府にライセンスが付与されます。

### 著作権

© Copyright 1983-2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Adobe® および Acrobat® は Adobe Systems Incorporated の商標です。

Windows® および MS Windows® は米国における Microsoft Corporation の登録商標です。

Microsoft® は米国における Microsoft Corporation の登録商標です。

その他の製品名は各社の商標またはサービス マークです。

## サポートについて

次の HP ソフトウェア サポート専用 Web サイトを参照することができます。

**<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>**

HP ソフトウェア オンライン サポートでは、対話型テクニカル サポート ツールをすぐにご利用いただけます。このサポート サイトでは、次の機能が用意されています。

- 技術情報の検索
- サポート ケースの登録とトラッキング、およびエンハンスメント要求の送信とトラッキング
- ソフトウェア パッチのダウンロード
- サポート 契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 利用可能なサービスの参照
- ユーザー同士のディスカッション
- ソフトウェア トレーニングの検索と登録

ほとんどのサポート エリアでは、アクセスするために HP Passport ユーザーとして登録、サインインする必要があります。また、多くのサポート エリアでサポート契約が必要です。

アクセス レベルに関する詳細は以下を参照してください。

**[http://h20230.www2.hp.com/new\\_access\\_levels.jsp](http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp)**

HP Passport ID の登録は以下で行うことができます。

**<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>**



# 目次

<b>1 HP Performance Agent のインストールまたはアップグレード</b> .....	7
はじめに .....	7
インストール要件 .....	9
ハードウェア .....	9
ソフトウェア .....	9
通信プロトコル .....	9
ディスク スペース .....	10
インストールまたはアップグレードの手順 .....	11
パフォーマンス ツールまたはプロセスの終了 .....	11
Performance Agent のインストールまたはアップグレード .....	12
Operations Manager を使用する Performance Agent のインストール .....	14
リモートドライブへのファイルのインストール .....	14
仮想環境における Performance Agent .....	15
ホスト オペレーティング システムの Performance Agent .....	15
ゲスト オペレーティング システムの Performance Agent .....	15
Performance Agent の削除 .....	16
<b>2 HP Performance Agent の実行方法</b> .....	17
はじめに .....	17
Performance Agent の起動と終了 .....	18
Performance Agent スクリプトの使用 .....	19
mwa スクリプトの使用 .....	21
プロトコルの変更 .....	23
自動的な起動と終了 .....	24
ステータスの確認方法 .....	24
ディレクトリのサンプル .....	25
ファイアウォールを介した通信 .....	26
HTTP 環境での通信 .....	27

Performance Agent ポートの設定 .....	28
ファイアウォール環境での HTTP クライアントの設定 .....	30
ファイアウォール設定の確認 .....	32
複数の IP アドレスを持つシステムの設定 .....	33
DCE 環境での通信 .....	33
Performance Manager と Performance Agent の通信の設定 .....	34
Reporter と Performance Agent の通信の設定 .....	37
RPC アドレスの制限 .....	39
安全な通信の設定 .....	40
証明書の使用 .....	40
クライアント認証の使用 .....	40
authip ファイルによる認証の有効化 .....	41
authip ファイルのフォーマット .....	42
データソースの設定 .....	44
データソース設定ファイルのフォーマット .....	45
parm ファイルの設定 .....	46
アラームの定義 .....	47
母国語のサポート .....	48
ドキュメントの表示と印刷 .....	49
Web 上でのドキュメントの参照 .....	50
Adobe Acrobat ファイル .....	50
ASCII テキスト ファイル .....	50
<b>3 coda の設定 .....</b>	<b>51</b>
はじめに .....	51
coda 名前空間 .....	51
coda 通信名前空間 (coda.comm) .....	54
通信ブローカー名前空間 (bbc.cb) .....	58
通信ブローカー ポート名前空間 (bbc.cb.ports) .....	59
HTTP 名前空間 (bbc.http) .....	61
<b>用語集 .....</b>	<b>63</b>
<b>索引 .....</b>	<b>71</b>

# 1 HP Performance Agent のインストール またはアップグレード

## はじめに

HP Performance Agent は、HP 9000 サーバー、HP Integrity サーバー、またはワークステーションから、パフォーマンス、リソース、トランザクションデータを取り込みます。また、最小限のシステム リソースを使用して、システム上の現在および過去のデータに関するアラーム状態の連続的な収集、記録、要約、タイムスタンプ作成、および検出を行います。収集したデータは、表計算ソフトや、HP Performance Manager などの分析ソフト、または他社の分析ソフトを使用して解析できます。

さらに、Performance Agent は HP Performance Manager、HP Network Node Manager、および HP Operations Manager といった当社製品にデータ アクセスを提供します。

Performance Agent は、HP Integrity Virtual Machines の監視に対応しています。詳細は、15 ページの「[仮想環境における Performance Agent](#)」を参照してください。



本書における Performance Manager は、バージョン 4.0 以降を指します。Performance Manager 3.x という名称は、以前 PerfView と呼ばれていた製品を指します。

Performance Agent は、データ ソース統合 (DSI: Data Source Integration) 技術を使用して、アプリケーション、データベース、ネットワーク、その他のオペレーティング システムなどの外部データ ソースからデータを受信し、アラーム状態を検出し、ログを記録します。Performance Agent が記録、保存したデータを使用して、次のことが可能になります。

- 環境の作業負荷の特徴づけ
- リソースの使用量と負荷バランスの分析
- 過去のデータの傾向分析とボトルネックの分離および特定
- トランザクション応答時間に基づいたサービス レベルの管理

- 容量計画の実行
- アラーム状態への応答
- システム管理問題の事前の解決

この製品に関する一般的な説明は、『HP Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』を参照してください。



このソフトウェアがあらかじめインストールされているシステムで Performance Agent を実行している場合は、第 2 章、「HP Performance Agent の実行方法」に進んでください。

# インストール要件

Performance Agent をインストールまたはアップグレードする前に、システムがこのセクションに記されている要件を満たしていることを確認してください。



多数の dsilog プロセスの実行を計画している場合、HP-UX カーネル パラメータの shmmni および nflocks の値を増やす必要があります。shmmni では、共有メモリ セグメントの最大数を指定します。nflocks では、システム上のファイルロックの最大数を指定します。どちらのデフォルト値も 200 です。

アクティブな DSI ログ ファイル セットでは、1 つの共有メモリ セグメントと 1 つ以上のファイル ロックが使用されます。shmmni および nflocks の設定は、System Administration and Maintenance ユーティリティ (SAM) を使用して変更できます。

## ハードウェア

HP-UX 11i Version 1、Version 2 および Version 3 リリース以降に対応している Performance Agent は HP 9000 サーバー、HP Integrity サーバー、および HP ワークステーションで動作します。

## ソフトウェア

このバージョンの Performance Agent には、HP-UX オペレーティングシステムの 11i v1 以降が必要です。

## 通信プロトコル

Performance Agent は、以下の通信プロトコルをサポートしています。

- HTTP(S) 1.1

- DCE

▶ HP Operations Agent、HP Operations Manager UNIX Management Server、HP Performance Manager、HP Performance Insight、および OV Internet Services などの HP ソフトウェア製品がインストールされているシステムでは、Performance Agent 4.70 のインストール後に、これらのソフトウェアを再起動することをお勧めします。

- ▶
- 1 新しいハードウェアの追加、および設定の変更をする場合は、`scopeux` を停止し、再起動して変更内容を有効にすることをお勧めします。
  - 2 HP-UX システムでは、すべてのデフォルトの OS デーモンおよびサービスが有効で実行されている必要があります。

## ディスクスペース

Performance Agent は `/opt/perf/` および `/opt/OV/` ディレクトリにインストールされていて、ログファイルとステータスファイルを `/var/opt/perf/` および `/var/opt/OV/` ディレクトリに作成します。

- Performance Agent を初めてインストールする場合は、`/opt/perf/` および `/opt/OV/` ディレクトリに 100 MB のディスクスペースが必要です。
- Performance Agent データベースおよびステータスファイルには、`/var/opt/perf/` および `/var/opt/OV/` ディレクトリに 125 MB のディスクスペースが必要です。

`parm` ファイルを使用して、ログファイルのデータ記憶領域を構成する方法については、『HP Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』の第 2 章、「`parm` ファイル」のセクションを参照してください。

# インストールまたはアップグレードの手順

Performance Agent は、DVD-ROM インストールメディアから利用可能で、数個のファイルセットから構成されています。ソフトウェアのサイズは約 260 MB です。

Performance Agent または GlancePlus をすでにシステムにインストールしている場合は、実行中のパフォーマンス ツールとプロセスをすべて終了します。詳細は、「パフォーマンス ツールまたはプロセスの終了」を参照してください。インストールの詳細は、「12 ページの「Performance Agent のインストールまたはアップグレード」」を参照してください。

## パフォーマンス ツールまたはプロセスの終了

- 1 **root** としてログインします。
- 2 アクティブなパフォーマンス ツールを確認するには、次のように入力して `perfstat` を実行します。

```
/opt/perf/bin/perfstat
```

`perfstat` によって、GlancePlus などのアクティブなパフォーマンス ツールが報告された場合は、Performance Agent をインストールする前にそれらのツールを終了してください。



パフォーマンス ツールを終了する前に、それらのツールを使用しているユーザーがいないことを確認してください。

- 3 インストール済みの Performance Agent が動作中の場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/mwa stop
```



`parm`、`alarmdef`、`ttd.conf`、`perflbd.rc` などのカスタマイズした設定ファイルやその他のカスタマイズしたログ ファイルは、インストールによって上書きされません。新しい設定ファイルは `/opt/perf/newconfig/` ディレクトリにインストールされます。

- 4 `midaemon` (測定インターフェイス デモン) が終了していることを、次のように入力して確認します。

```
ps -ef | grep midaemon
```

midaemon がアクティブである場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/midaemon -T
```

- 5 ttd (トランザクショントラッキング デーモン) が終了していることを、次のように入力して確認します。

```
ps -ef | grep ttd
```

ttd がアクティブである場合は、次のように入力して終了します。

```
/opt/perf/bin/ttd -k
```

▶ ttd を終了する場合、ARM 装備のアプリケーションを終了してから、ttd と Performance Agent のプロセスを再起動してください。

- 6 perfstat コマンドを再度実行して、アクティブなパフォーマンス ツールやプロセスがないことを確認します。すべてのツールまたはプロセスを終了後、インストールプロセスに進みます。

## Performance Agent のインストールまたはアップグレード

- 1 **root** としてログインします。
- 2 Performance Agent をインストールするには、他のソフトウェア パッケージを HP-UX システムにインストールする場合と同様に、swinstall プログラムを実行します。
- 3 Performance Agent 製品は GlancePlus Pak に含まれています。
  - a GlancePlus Pak をインストールする場合は、swinstall のソースをインストール メディアに変更し、GlancePlus Pak バンドルを選択します。  
または、
  - b GlancePlus Pak を購入していない場合は、swinstall のソースをインストール メディアに変更し、Performance Agent バンドルを選択します。
- 4 このインストール プロセスでは、/var/adm/sw/ にある swinstall.log と swagent.log という名前のログ ファイルの最後に追加情報が記載されます。これらのファイルには、インストールに関するシステム メッセージとそのシステムで発生したすべての障害の記録が含まれます。これらのファイルでインストール中に発生したエラー メッセージを確認し、必要に応じて適切な処置をとってください。

swinstall.log ファイルの最後の 100 行を参照するには、次のコマンドを入力します。

```
tail -100 /var/adm/sw/swinstall.log
```

swinstall プログラムを対話型モードで実行する場合、swinstall の実行中に swinstall.log ファイルの内容を確認することができます。対話型モードで実行しない場合は、/var/adm/sw/ にある swinstall.log および swagent.log ファイルでエラーや障害を確認できます。

Performance Agent をインストールすると、/etc/profile/ で使用するファイルが自動更新され、/opt/perf/bin/ 内の製品の実行プログラムにアクセスできます。また、シェル環境変数を明示的に更新しなくても、man ページにアクセスできます。これは次回のログイン時から有効になります。

Performance Agent のインストールが完了しました。Performance Agent の起動および実行方法については、第 2 章、「HP Performance Agent の実行方法」を参照してください

-  同一システムで GlancePlus を実行する場合、GlancePlus のバージョンが Performance Agent と同じリリースバージョンであることを確認し、必要に応じてアップデートを実行してください。Performance Agent および GlancePlus は常に同じバージョンを使用する必要があります。
  
-  クラスタの保守操作中は、Performance Agent を終了し、保守操作が完了してから再起動してください。

## Operations Manager を使用する Performance Agent のインストール

Operations Manager for UNIX 7.x および 8.x を使用している場合、管理サーバーから HP-UX 管理ノードに、Performance Agent をインストールすることができます。



このバージョンの Performance Agent は、Operations Manager 8.x 管理サーバーがインストールされている Itanium システムにインストールすることはできません。

Operations Manager for UNIX バージョン 7.x でのインストールの方法については、『HP Operations Manager for UNIX システム管理リファレンス ガイド Vol. II』の第 6 章「UNIX 用の HP Performance Agent」を参照してください。Operations Manager for UNIX バージョン 8.x でのインストールの方法については、『HP Operations Manager 管理リファレンス ガイド』の第 4 章「HP Performance Agent」を参照してください。

### リモート ドライブへのファイルのインストール

ディスク スペースに問題がある場合は、`/var/opt/perf/` ディレクトリを異なるファイル システムにリンクさせることができます。たとえば、`/var/opt/perf/` ディレクトリを、ローカルのファイル システムではない、リモートの NFS マウント ポイントにリダイレクトさせます。その場合、次の点について考慮する必要があります。

- Performance Agent は、WAN 環境下ではリモート NFS ロギングをサポートしません。Performance Agent は、ローカルにマウントされているログ ファイルを最適に使用できるように設計されています。
- LAN 環境下でログ ファイルをリモート NFS にマウントすると、データ ログのしきい値によってはネットワークの負荷が増大し、その結果 Performance Agent とネットワーク上の他のアプリケーションのパフォーマンスが低下することがあります。また、ログ ファイルの保守に必要な時間がリモート アクセスによって大幅に増大し、アラーム処理でのタイムアウト エラーの原因になる場合もあります。



このバージョンの Performance Agent の詳細は、`/opt/perf/ReleaseNotes/ovpa` ファイルに含まれている「リリース ノート」を参照してください。

# 仮想環境における Performance Agent

このバージョンの Performance Agent は、HP Integrity Virtual Machines の監視に対応しています。ゲストオペレーティングシステムとホストオペレーティングシステムの双方に Performance Agent をインストールできます。インストール手順については、11 ページの「インストールまたはアップグレードの手順」を参照してください。

- ▶ HPVM 1.0 は、Performance Agent および HP GlancePlus (GlancePlus) でサポートされていません。

## ホスト オペレーティング システムの Performance Agent

ホストオペレーティングシステムとは、HPVM をインストールしたシステムを指します。Performance Agent をホストマシンにインストールすると、次のデータを取り込むことができます。

- システム全体のパフォーマンス、アプリケーション、トランザクション、およびリソース使用量に関するデータ
- 個々の仮想マシンのパフォーマンスとリソース使用量に関するデータ  
個々のゲストオペレーティングシステムのパフォーマンスとリソースに関するデータを記録するために、BYLS という新しいクラスのメトリックが導入されています。

## ゲスト オペレーティング システムの Performance Agent

ゲストオペレーティングシステムとは、HPVM 上で実行されるシステムを指します。Performance Agent をゲストオペレーティングシステムにインストールすると、システム全体のパフォーマンス、リソース、およびトランザクションに関するデータを取り込むことができます。取り込まれるリソース使用量の値はすべて、論理的な使用量を表します。

- ▶ すべてのメトリックとその説明が記載されたリストは、『Dictionary of Performance Metrics』を参照してください。

# Performance Agent の削除

- 1 **root** でログインしていることを確認します。
- 2 Performance Agent をアンインストールするには、他のソフトウェア パッケージを HP-UX システムからアンインストールする場合と同様に、swremove プログラムを実行します。
- 3 Performance Agent 製品は GlancePlus Pak に含まれています。
  - a GlancePlus Pak をアンインストールする場合は、swinstall のソースをインストール メディアに変更し、GlancePlus Pak バンドルを選択します。または、
  - b GlancePlus Pak を購入していない場合は、swinstall のソースをインストール メディアに変更し、Performance Agent バンドルを選択します。
- 4 このアンインストール プロセスでは、/var/adm/sw/swremove.log と /var/adm/sw/swagent.log という名前の 2 つのログ ファイルの最後に追加情報が記載されます。これらのファイルには、システム メッセージとアンインストール中にそのシステムで発生したすべての障害の記録が含まれます。この 2 つのログ ファイルでアンインストール中に記録されたエラー メッセージを確認し、必要に応じて適切な処置をとってください。

swremove.log ファイルの最後の 100 行を参照するには、次のコマンドを入力します。

```
tail -100 /var/adm/sw/swremove.log
```

swremove を対話型モードで実行する場合、swremove の実行中に swremove.log ファイルの内容を確認できます。対話型モードで実行しない場合は、/var/adm/sw/ にある swremove.log および swagent.log でアンインストール中のエラーや障害を確認できます。

他の HP ソフトウェア製品でも共有されていて、他のツールを使用するために必要な製品パッケージの場合は、システムにインストールされたままになることがあります。関連するツールがすべて削除された時点で、これらのパッケージも削除されます。

## 2 HP Performance Agent の実行方法

### はじめに

この章では、HP-UX システム上での Performance Agent の起動と実行に関する作業について説明します。

次のような内容を取り上げます。

- Performance Agent の起動と終了の手順
- ファイアウォールを介した通信
- /etc/rc.config.d/ovpa ファイルでの変数設定
- Performance Agent の実行
- HP-UX システムの parm ファイルの設定
- データソースの設定
- アラーム定義の設定
- coda の設定



データソース統合 (DSI: Data Source Integration) 機能を使用して、他のソースのデータを記録する場合は、『HP Performance Agent for UNIX データソース統合ガイド』を参照してください。

Performance Agent は従来の DCE モードに適合する HTTP データ通信メカニズムに対応しています。Performance Agent を初めてインストールする場合、デフォルトのデータ通信モードは HTTP です。Performance Agent 4.5 を使用する場合は、以前に使用していた DCE データ通信モードが、デフォルトのモードになります。データ通信モードを新しい HTTP モードに移行するには、インストール後に設定を変更する必要があります。Performance Agent は、HP Operations Manager 8.x 環境でのみ、HTTPS データ通信に対応しています。

# Performance Agent の起動と終了

インストールの終了後は、Performance Agent を起動できます。Performance Agent の ovpa と mwa スクリプトにより、次のタスクを実行できます。

- すべてまたは一部のプロセスの起動
- 現在実行中のプロセスの終了または再起動

Performance Agent を初めてインストールする場合、デフォルトのデータ通信モードは HTTP です。Performance Agent 4.5 を使用する場合は、以前に使用していた DCE データ通信モードが、デフォルトのモードになります。データ通信プロトコルの変更に関する詳細は、23 ページの「プロトコルの変更」を参照してください。

有効にするデータ通信プロトコルに応じて、ovpa、mwa のいずれかのスクリプトを使用し、Performance Agent を起動または終了してください。



通常は、ovpa スクリプトで Performance Agent を起動し、HTTP データ通信プロトコルを有効にすることをお勧めします。DCE データ通信プロトコルを使用する場合は、後方互換性を確保するために、mwa スクリプトを使用してください。

以下の表は、各プロトコルで開始されるサービスのリストです。

**表 1 各プロトコルで開始される Performance Agent のサービス**

HTTP プロトコルで開始されるサービス	DCE プロトコルで開始されるサービス
scopeux	scopeux
coda	coda
perfalarm	perfalarm
midaemon	midaemon
ttd	ttd
ovc	ovc
ovbbccb	ovbbccb

**表 1 各プロトコルで開始される Performance Agent のサービス**

HTTP プロトコルで開始されるサービス	DCE プロトコルで開始されるサービス
	perflbd
	rep_server
	alarmgen (perfalarmがない場合)

▶ DCE 通信では、perflbd、rep\_server、alarmgen プロセスが使用されます。

Performance Agent を起動する前に、以下を入力して、プロセスが実行中であるか確認します。

**`/opt/perf/bin/perfstat`**

## Performance Agent スクリプトの使用

以下に、ovpa スクリプトを使用して Performance Agent を起動または終了する手順を示します。

### Performance Agent の起動

Performance Agent を使用して、Performance Agent とそのプロセスを起動する手順は次のとおりです。

- 1 **root** としてログインします。
- 2 次のように入力します。**`/opt/perf/bin/ovpa start`**

ovpa start スクリプトにより、Performance Agent および次のプロセスが起動します。

- scopeux (データ コレクタ)
- midaemon (測定インターフェイス デーモン)
- ttd (トランザクション トラッキング デーモン)

- coda デーモン
- ovc
- ovbbccb
- アラーム ジェネレータ

スクリプトを実行すると、起動されたプロセスのステータスが画面に表示されます。

## Performance Agent の終了

ovpa スクリプトとオプションを使用して、実行中の Performance Agent のプロセスを終了したり再起動したりすることができます。

ovpa stop コマンドにより、次のプロセスを除く Performance Agent のすべてのプロセスが終了します。

- ttd (トランザクション トラッキング デーモン)
- ovc
- ovbbccb

ttd は常に実行中になります



Operations Manager エージェントがシステムで実行中の場合は、Performance Agent stop を入力しても coda デーモンは終了しません。



ttd を終了する必要がある場合は、実行中の ARM 装備のアプリケーションを終了してから、ttd と Performance Agent のプロセスを再起動してください。

## Performance Agent の再起動

次のコマンド オプションを使用して、Performance Agent を再起動します。

- ovpa restart server

コマンドを実行すると、次のタスクが実行されます。

- coda の一時的な終了および再起動
- アラームの無効化および Performance Manager などのクライアントへのアクセスの無効化

- datasources ファイルの読み込み
- perfalarm プロセスの終了および再起動
- alarmdef ファイルの読み込み
- ovpa restart
  - コマンドを実行すると、次のタスクが実行されます。
  - scopeux とサーバー プロセスの一時的な終了および再起動
  - parm ファイルの読み込み
  - トランザクションデーモン ttd に、設定ファイル ttd.conf を読み込むように指示
- ovpa restart alarm
  - このコマンドを実行すると、アラーム ジェネレータ プロセスに、alarmdef ファイルを再度読み込むよう指示します。alarmdef ファイルに変更を加えた場合は、Performance Agent のすべてのプロセスを再起動しなくても新しいアラームの定義が有効になります。このコマンドによって他のプロセスが中断されることはありません。

## mwa スクリプトの使用

以下に、mwa スクリプトを使用して Performance Agent を起動または終了する手順を示します。

### Performance Agent の起動

mwa を使用して、Performance Agent とそのプロセスを起動する手順は次のとおりです。

- 1 **root** としてログインします。
- 2 次のコマンドを入力して、Performance Agent とそのプロセスを起動します。

```
/opt/perf/bin/mwa start
```

mwa start スクリプトにより、Performance Agent と、scopeux (データコレクタ)、midaemon (測定インターフェイスデーモン)、ttd (トランザクショントラッキングデーモン)、coda、ovc、ovbbccb、perflbd、

rep\_server、およびアラーム ジェネレータなどのすべてのプロセスが起動します。スクリプトが実行されると、動作中のプロセスおよび使用中のファイルの一部の名前が画面に表示されます。

## Performance Agent の終了

mwa スクリプトとオプションを使用して、実行中の Performance Agent のプロセスを終了したり再起動したりすることができます。

- mwa stop コマンドを実行すると、ttd (トランザクション トラッキング デーモン)、ovc、ovbbccb を除く、Performance Agent のすべてのプロセスが終了します。
- ▶ • ttd は常に実行中になります。
- 他の製品で coda デーモンが使用されている場合は、mwa stop を入力しても coda は終了しません。

## Performance Agent の再起動

- Performance Agent を再起動するには、次のコマンドを使用します。

```
mwa restart
```

設定ファイルの変更は、対象のプロセスが再起動されるまでシステム上で有効になりません。

- mwa restart server

このコマンドを実行すると、次のタスクが実行されます。

- coda デーモンおよびレポジトリ サーバーの終了および再起動
- 一時的なアラームの無効化および Performance Manager などのクライアントへのアクセスの無効化
- perflbd.rc ファイルの再読み込み
- アラーム ジェネレータ プロセスの終了と起動
- alarmdef ファイルの再読み込み

HTTP ベースのアラーム ジェネレータである perfalarm がデフォルトで有効になります。

- mwa restart

コマンドを実行すると、次のタスクが実行されます。

- サーバープロセスと、coda、scopeux、およびトランザクションデーモンである ttd を含むすべてのデーモンの一時的な終了およびその後の再起動
- parm ファイルとトランザクション設定ファイル ttd.conf の再読み込み



ttd を終了する場合は、実行中の ARM 装備のアプリケーションを終了してから、ttd と Performance Agent のプロセスを再起動してください。

- mwa restart alarm は一時的にアラーム ジェネレータのプロセスを終了させ、その後、再起動させて alarmdef ファイルを再度読み込みます。この動作によって他のプロセスが中断されることはありません。

## プロトコルの変更

Performance Agent の初回インストールの際、選択されたプロトコルは /etc/rc.config.d/ovpa ファイルに環境変数 MWA\_PROTOCOL に対する追加として記述されます (たとえば、MWA\_PROTOCOL=http)。

### DCE モードへの切り替え

ovpa スクリプトを使用して、DCE データ通信コンポーネントを開始または終了することはできません。/etc/rc.config.d/ovpa ファイルの MWA\_PROTOCOL パラメータに dce を設定し、mwa スクリプトを使用して Performance Agent を起動します。

### HTTP モードへの切り替え

プロトコルを HTTP に切り替える場合は、/etc/rc.config.d/ovpa ファイルの MWA\_PROTOCOL パラメータに http を設定して、Performance Agent を再起動します。HTTP データ通信モードを使用して Performance Agent を起動するには、ovpa または mwa スクリプトのいずれかを使用します。mwa スクリプトは、MWA\_PROTOCOL に設定されている値に応じて、HTTP、DCE、または NCS データ通信コンポーネントを開始します。MWA\_PROTOCOL で http を指定している場合は、ovpa および mwa スクリプトにより、同じコンポーネントが開始されます。



HTTP 通信プロトコルは、インストールの際に選択したプロトコルに関わらず、常に利用可能です。HTTP データ通信で使用されるデーモンは、デフォルトでシステムにインストールされ、有効になります。

## 自動的な起動と終了

システムの再起動時に自動で Performance Agent を起動するプロセス、およびシステムのシャットダウン時に Performance Agent を自動で終了するプロセスは、Performance Agent 起動およびシャットダウン スクリプトと Performance Agent 起動設定ファイル (/etc/rc.config.d/ovpa) により制御されます。

Performance Agent 起動設定ファイルには、システム起動時の Performance Agent の機能を制御するさまざまな環境変数が含まれています。このファイルは、Performance Agent システム起動およびシャットダウン スクリプトのソースファイルです。

次の環境変数およびシェル変数を編集して、Performance Agent のデフォルトの動作を変更することができます。

- `MWA_START` は、システムをリブートしたときの Performance Agent の自動開始を制御します。この変数は、以下の値のうちのいずれかをとりまします。
  - 0 システム起動時に Performance Agent を起動しません。
  - 1 システム起動時に Performance Agent を起動します。
- `MWA_START_COMMAND` は、システムのリブート時に Performance Agent を起動するために使用されるスクリプト オプションを指定する変数です。通常、この変数は次のように設定されます。 `/opt/perf/bin/mwa start`



Performance Agent 起動設定ファイルは、Performance Agent のパッチの適用時または更新時に上書きされないため、加えた変更はすべて保持されます。

## ステータスの確認方法

Performance Agent を起動すると、`/var/opt/perf/` および `/var/opt/OV/` ディレクトリに数個のステータス ファイルが作成されます。`perfstat` コマンドを使用して、Performance Agent のプロセスのステータスを確認できます。

次のステータス ファイルには、Performance Agent のプロセスで生じる障害を解決するのに使用できる診断情報が含まれます。

```
/var/opt/perf/status.alarmgen  
/var/opt/perf/status.perflbd  
/var/opt/perf/status.rep_server  
/var/opt/perf/status.scope  
/var/opt/perf/status.perfalarm  
/var/opt/perf/status.ttd  
/var/opt/perf/status.mi  
/var/opt/OV/log/coda.txt
```



Performance Agent プロセスがメッセージをステータス ファイルに書き込むたびに、ファイルのサイズが 1 MB を超えるかどうかを確認されます。1 MB を超える場合は、ファイル名が `status.filename.old` に変更され、新しいステータス ファイルが作成されます。

## ディレクトリのサンプル

`/opt/perf/examples/` ディレクトリには、設定ファイルと構文ファイルの例、および当社のパフォーマンス ツールをカスタマイズするために使用するプログラム ファイルのサンプルが含まれています。たとえば、`/opt/perf/examples/config/` サブディレクトリには、サンプルのアラーム定義と `parm` ファイルのアプリケーション指定パラメータの例が含まれています。詳細は、`/opt/perf/examples/README` ファイルを参照してください。

## ファイアウォールを介した通信

ファイアウォールは、あるネットワークと他のネットワークの間のデータの流れをフィルタリングする方法として定義することができます。Performance Agent では、クライアント (Performance Manager や Reporter など) とサーバー アプリケーション間のデータ アクセスに関して、以前からパケットフィルタリング ネットワーク ファイアウォールを介した通信メカニズムに対応していましたが、今回さらに、HTTP 1.1 ベースの通信インターフェイスに対応しました。



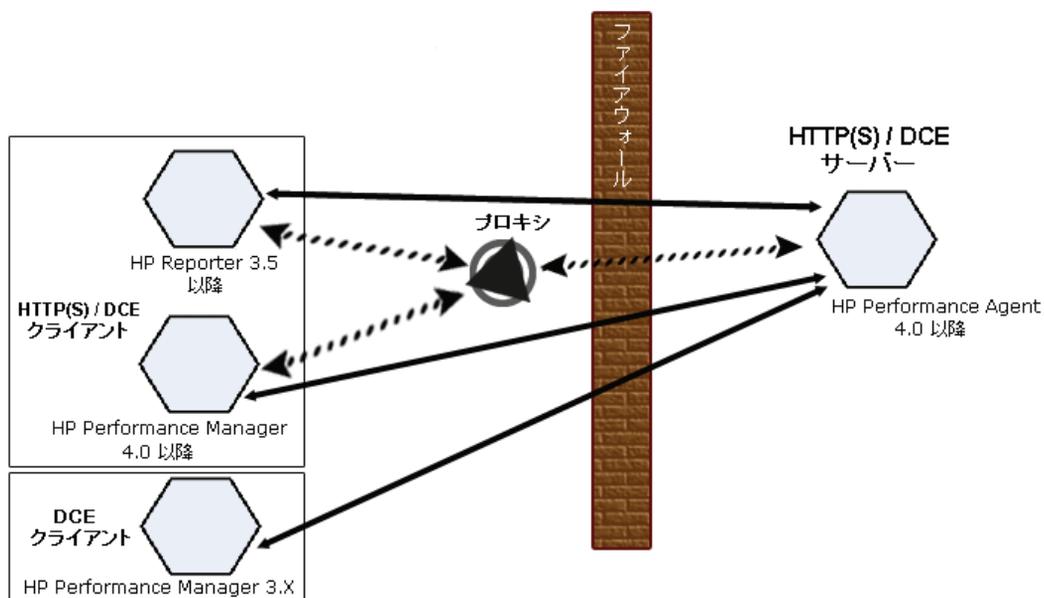
Performance Agent は、Operations Manager 8.x 環境でのみ、証明書ベースの安全なデータ通信 (HTTPS) に対応しています。詳細は、40 ページの「[証明書の使用](#)」を参照してください。

HTTP ベースのインターフェイスはプロキシが使用できるため、柔軟で、ポート数が少なくすみ、ファイアウォールに適しています。引き続き DCE インターフェイスも使用できます。

以下のセクションでは、ファイアウォールを介した HTTP および DCE 通信の設定方法を説明します。

- [HTTP 環境での通信](#)
- [DCE 環境での通信](#)

図 1 ファイアウォール環境での Performance Agent との通信



▶ Performance Manager 3.x という名称は、以前 PerfView と呼ばれていた製品を指します。

## HTTP 環境での通信

ファイアウォールを設定するためには、通信を開始するシステム (クライアント) および通信要求を受信するシステム (サーバー) を把握し、それに応じてファイアウォールのルールを設定することが重要です。典型的なリモート通信では、ソースポートを使用しているクライアントが、リモートシステムの宛先ポートをリッスンしているサーバーに接続します。クライアントおよびサーバーのデータフローを含む、ファイアウォール環境を把握します。以下のタスクを実行し、ファイアウォール環境での Performance Agent との通信を設定します。

- 1 Performance Agent ポートの設定
- 2 ファイアウォール環境での HTTP クライアントの設定

### 3 ファイアウォール設定の確認

27 ページの図 1 では、Performance Agent がファイアウォールを介して Reporter (バージョン 3.5 以降) および Performance Manager (バージョン 4.0 以降) と通信する方法を示しています。Performance Agent は HTTP または HTTPS サーバーです。Reporter および Performance Manager 4.x は HTTP クライアントです。Performance Manager 5.0 は HTTP または HTTPS クライアントに設定することができます。HTTP プロキシを使用する場合、Reporter および Performance Manager はプロキシを経由して、Performance Agent と通信します。

Performance Manager バージョン 3.x は PerfView テクノロジを使用しています。PerfView は HTTP 通信コンポーネントを使用しませんが、DCE データ通信モードが有効な場合には、Performance Agent 4.5 に接続します。

## Performance Agent ポートの設定

ファイアウォール環境の Performance Agent ポートは、次のいずれかの方法で設定し、確認することができます。

- 2 ポート通信の設定
- 単一ポート通信の設定
- ポート設定の確認

BBC5 を使用する Performance Agent システムでは、デフォルトで BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。

### BBC 通信ブローカー用のポート設定

BBC 通信ブローカーが使用するデフォルト ポートを設定できます。ovconfchg コマンドを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。次のオプションのいずれかを使用します。

```
— ovconfchg -ns bbc.cb -set SERVER_PORT <ポート>
```

または、

```
— ovconfchg -ns bbc.cb.ports -set PORTS <ドメイン>:<ポート>
```

```
例: ovconfchg -ns bbc.cb.ports -set PORTS  
xyz.abc.com:50383
```

ポート変更には 2 番目のオプションのほうに適しています。

次のコマンドを入力して、Performance Agent を再起動します。

```
ovpa restart server
```

## 2 ポート通信の設定

デフォルトでは、coda デーモンは、BBC 通信ブローカーが使用するポート 383 に加えて、動的に選択される 2 つ目のポートを使用します。ovconfchg コマンドを使用して、任意の well known ポートをリッスンするよう coda のポートを設定することができます。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_PORT <ポート番号>
```

```
ovpa restart server
```



ファイアウォールを介してリモートから Performance Agent に接続する場合、動的なポートの使用が難しいことがあります。これは、ファイアウォールのどのポートを開くべきか把握できない場合があるためです。

## 単一ポート通信の設定

Performance Agent システムでは、BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。ovconfchg コマンドを使用して、通信ブローカーが使用するポートを共有するよう coda のポートを設定することができます。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

```
ovpa restart server
```



単一ポート通信が設定されている状態で 2 ポート通信を有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR
```

## ポート設定の確認

ポート設定を確認するには、次のコマンドを入力します。

```
perfstat -d
```

次の情報が出力されます。

- coda が使用するポートのポート番号
- BBC 通信ブローカーが使用するポートのポート番号
- ポート設定
- 安全性の高い通信が有効かどうか
- coda メトリック収集が有効かどうか

次に例を示します。

```
Datacomm configuration :
```

```
-----
```

```
Coda Port                                49552 (Dynamic)
                                           Two port Communication
BBC communication broker port            383
SSL security                             NONE
Coda Metric Collection(Prospector)      Disabled
```

## ファイアウォール環境での HTTP クライアントの設定

ファイアウォール環境で HTTP クライアントを設定する方法は 2 つあります。

- HTTP プロキシを用いた、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定
- HTTP プロキシを使用しない、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

どちらの場合にも、Performance Agent ノードからデータにアクセスするには、HTTP サーバー (Performance Agent) 側のポートが 1 つだけ開いている必要があります。

### HTTP プロキシを用いた、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

ファイアウォールを介して通信する場合は、HTTP プロキシの使用をお勧めします。この方法では、環境内ですでに使用されているプロキシを用いることにより、設定が簡略化されます。プロキシが双方向で使用されている場合、ファイアウォールでは厳密に 1 つのポートを開く必要があります。Performance Agent により収集されたデータにアクセスするには、HTTP サーバー (Performance Agent) 用のポートと HTTP クライアント (Reporter および Performance Manager) 用のポートが開かれている必要があります。



デフォルトの 383 ポートは変更しないことをお勧めします。

HTTP プロキシを使用する場合は、Windows または UNIX 対応の Reporter および Performance Manager に対して、Performance Agent に接続するために使用するプロキシを指定する必要があります。

Performance Manager バージョン 5.0 以降および Reporter 3.7 以降を設定するには、次の手順を実行します。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set PROXY proxy:port+(a)-(b)
```

変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名、ネットワーク、および IP アドレスをコンマで区切った形式のリストです。区切り記号「;」または「,」を使用して、1 つの PROXY キーに対して複数のプロキシを定義することができます。リストの前の「-」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されないことを示し、リストの前の「+」は、それらの要素で対象のプロキシが使用されることを示します。最初に適合したプロキシが使用されます。

Reporter バージョン 3.6 以前および Performance Manager 4.x を設定するには、次の手順を実行します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt 設定ファイルを編集します。

default.txt ファイルの [DEFAULT] セクションで、PROXY に関連する行を特定し、次のように PROXY パラメータを設定します。

```
PROXY web-proxy.hp.com:8088-(localhost, *.hp.com) + (*)
```

この例では、ローカル マシン (localhost) への要求、および HP 内 (たとえば、**www.hp.com** のような、\*.hp.com に合致するもの) への要求を除いて、web-proxy プロキシが、すべてのサーバー (\*) に対してポート 8088 で使用されます。

## HTTP プロキシを使用しない、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

HTTP プロキシが利用できない場合は、HTTP クライアント (Reporter および Performance Manager システム) 上で、追加の設定が必要になります。

Reporter および Performance Manager for Windows が同一のシステムにインストールされていて、双方が同時に Performance Agent にアクセスする場合は、このセクションに記載されている方法でポート範囲を指定します。それらが異なるシステムで実行されている場合は、それぞれに単一のポートを指定することができます。使用している Performance Manager および Reporter のバージョンに合わせて、次のオプションを選択します。

Performance Manager 5.0 以降および Reporter 3.7 を設定するには、次の手順を実行します。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT <ポート範囲>
```

<ポート範囲> は、使用するポート範囲です。

次に例を示します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT 14000-14003
```

Reporter バージョン 3.6 以前および Performance Manager 4.x を設定するには、次の手順を実行します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のように編集します。

- 1 CLIENT\_PORT に適用される行を特定して、;CLIENT\_PORT = の行をコメント解除します。
- 2 CLIENT\_PORT パラメータに、ポート範囲を指定します。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = <ポート範囲>
```

<ポート範囲> は、使用するポート範囲です。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = 14000-14003
```

## ファイアウォール設定の確認

設定を確認するには、次のコマンドを使用します。

```
ovcodautl -ping -n <システム名>
```

このコマンドの出力には、通信設定の状態が表示されます。

例:

```
/usr/lpp/OV/bin/ovcodautl -ping -n ovpaixt6
```

次のメッセージが表示されます。

```
Ping of 'OvBbcCb' at: 'http://ovpaixt6:383/Hewlett-Packard/  
OpenView/BBC/ping' successful
```

```
Ping of 'Coda' at: 'http://ovpaixt6:34425/Hewlett-Packard/  
OpenView/Coda/' successful
```

## 複数の IP アドレスを持つシステムの設定

ご使用の環境に、複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスを持つシステムがあり、HTTP ベースの通信に専用のインターフェイスを使用する場合は、CLIENT\_BIND\_ADDR パラメータおよび SERVER\_BIND\_ADDR パラメータで、使用する IP アドレスを指定することができます。

- Performance Agent (サーバー) システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、SERVER\_BIND\_ADDR パラメータを次のように指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set SERVER_BIND_ADDR <IP Address>
```

- Performance Manager 5.0 (クライアント) システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、CLIENT\_BIND\_ADDR パラメータを次のように指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_BIND_ADDR <IP Address>
```

- Reporter/Performance Manager 4.x システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、CLIENT\_BIND\_ADDR パラメータを指定します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のように編集します。

- a CLIENT\_BIND\_ADDR に適用される行を特定して、以下の行をコメント解除します。

```
;CLIENT_BIND_ADDR =
```

- b CLIENT\_BIND\_ADDR パラメータに、IP アドレスを指定します。

## DCE 環境での通信

DCE 環境では、Performance Agent は相互プロセス通信に対して動的に割り当てられたソケット ポート番号を使用します。パケットフィルタリング ネットワーク ファイアウォールを介して通信するには、静的に定義されたポート番号を使用するように Performance Agent サーバーを設定します。

## Performance Manager と Performance Agent の通信の設定

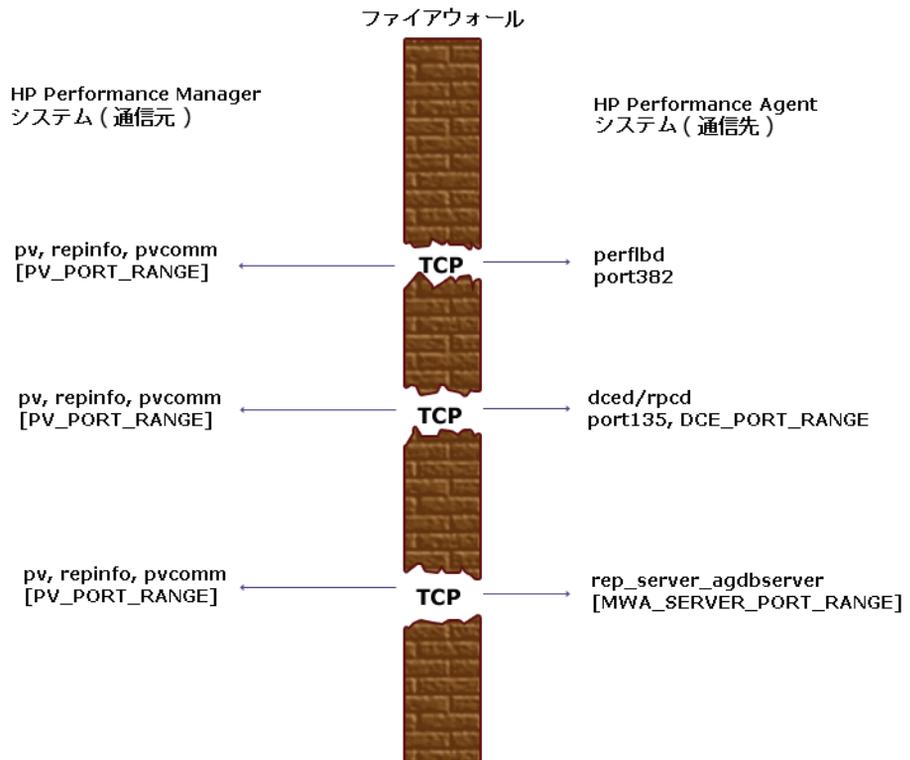
Performance Agent 用のソケット ポート番号の設定方法は、Performance Agent と通信する Performance Manager のバージョンによって異なります。ソケット ポート番号を設定するには、「Performance Manager C.03.00 以降と Performance Agent の通信の設定」の指示に従ってください。

### Performance Manager C.03.00 以降と Performance Agent の通信の設定

Performance Agent と Performance Manager のファイアウォール通信を設定する方法は、どちらのプログラムが通信元であるかによって異なります。

### Performance Manager C.03.00 以降 (通信元) と Performance Agent の通信の設定

Performance Manager が通信元である場合、TCP プロトコルを使用して、次の図に示されている TCP ソケット ポート番号で、Performance Agent との通信が行われます。



MWA\_SERVER\_PORT\_RANGE を静的に定義された TCP ソケット ポート番号として設定するには、`/etc/services` ファイルに次の項目を追加します。

```
agdbserver    xxxx/tcp  
rep_server    yyyy/tcp
```

xxxx と yyyy は、未使用のポート番号を示します。agdbserver と rep\_server は、指定されたポート番号に登録します。perflbd.rc ファイルに複数のデータソースが設定されている場合、最初の rep\_server は指定された yyyy ポート番号を使用します。その他のすべての rep\_server は、使用されている最後のポート番号に 1 を追加します。

たとえば、`/etc/services` ファイルに次の行を含めたとします。

```
agdbserver    20001/tcp  
rep_server    20002/tcp
```

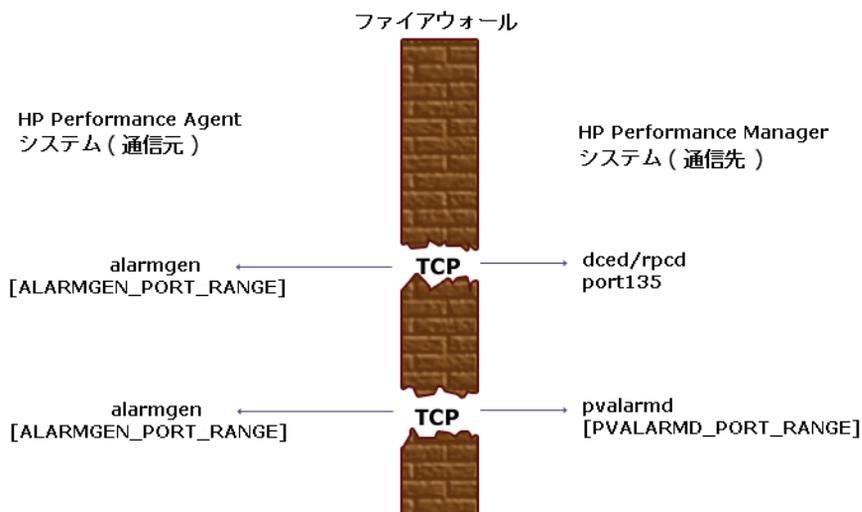
また、perflbd.rc ファイルに 3 つのデータソースが設定されているとすると、Performance Agent は次の TCP ポート番号を使用します。

```
agdbserver    20001  
rep_server    20002  
rep_server    20003  
rep_server    20004
```

MWA\_RANGE は、この例の `/etc/services` に基づいて 20001～20004 となります。

## Performance Agent (通信元) と Performance Manager C.03.00 以降の通信の設定

Performance Agent が通信元である場合、TCP プロトコルを使用して、次の図に示されている TCP ソケット ポート 番号で、Performance Manager との通信が行われます。



以前は、ファイアウォールを介して Performance Agent から Performance Manager に通信する場合に、ファイアウォールのポート 135/UDP が開かれていました。現在では、ファイアウォールの設定を変更し、ポート 135/TCP を開く必要があります。これは、Performance Manager のバージョンとは無関係に、Performance Manager システムのポート 135 への接続に使用されるプロトコルが UDP から TCP に変更されたためです。

alarmgen プロセス用に ALARMGEN\_PORT\_RANGE を設定するには、`/var/opt/perf/vppa.env` ファイルを編集し、`RPC_RESTRICTED_PORTS` を次のように設定します。

```
RPC_RESTRICTED_PORTS=ncacn_ip_tcp[xxxx-yyyy]
```

xxxx-yyyy は未使用のポート番号の範囲です。ポート範囲を計算するための数式は次のとおりです。

2 × (Performance Agent システムからアラームを受け取る Performance Manager システムの数)

たとえば、Performance Agent システムが 2 つの Performance Manager システムにアラームを送信していた場合、vppa.env ファイルで RPC\_RESTRICTED\_PORTS を次の範囲に設定します。

**RPC\_RESTRICTED\_PORTS=ncacn\_ip\_tcp[30001-30004]**

- ▶ この環境変数は、ローカル ホスト外部の通信に使用されるポートにのみ影響を与えます。alarmgen と rep\_server の間のローカル通信のような、ローカル ホスト内部で使用されるポートは、この変数による影響を受けません。

/opt/perf/bin/mwa restart server を使用して Performance Agent サーバーを再起動し、ポートの制限を有効にします。

PV\_PORT\_RANGE に設定する範囲の詳細については、『HP Performance Manager インストールガイド』を参照してください。

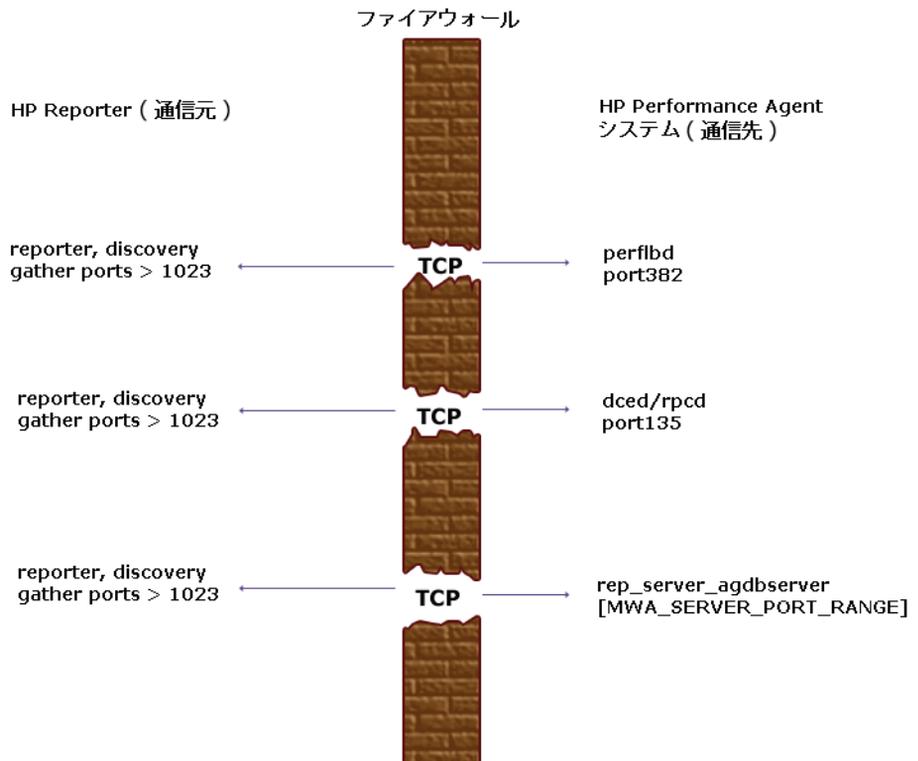
- ▶ NAT (Network Address Translation) IP アドレスを使用するファイアウォールを介して、Performance Agent から Performance Manager にアラームを送信することはできません。

## Reporter と Performance Agent の通信の設定

Performance Agent 用のソケット ポート番号の設定方法は、Performance Agent と通信する Reporter のバージョンによって異なります。ソケット ポート番号を設定するには、「Reporter A.03.50 以降と Performance Agent の通信の設定」の指示に従ってください。

## Reporter A.03.50 以降と Performance Agent の通信の設定

Reporter は TCP プロトコルを使用して、次の図に示されている TCP ソケットポート番号で、Performance Agent と通信します。



MWA\_SERVER\_PORT\_RANGE を静的に定義された TCP ソケットポート番号として設定する方法については、34 ページの「Performance Manager C.03.00 以降と Performance Agent の通信の設定」を参照してください。

## RPC アドレスの制限

マルチホーム環境において、DCE/RPC サービスを特定の LAN カードに制限するには、RPC\_SUPPORTED\_NETADDRS 環境変数を使用します。この環境変数が設定されていると、一覧に示されているアドレスだけがエンドポイント マップでアドバタイズされ、一覧にないアドレスについては、そのサーバーのアドレス リストから外されます。

指定された IP アドレス セットしか使用できないように制限するには、サーバーを起動する前に、まず RPC\_SUPPORTED\_NETADDRS 環境変数を設定します。

構文は次のようになります。

```
RPC_SUPPORTED_NETADDRS=protocol:ip_address[,protocol:ip_address]
```

Performance Agent サーバーの環境変数を設定するには、/var/opt/perf/vppa.env ファイルに次の行を追加します。

```
RPC_SUPPORTED_NETADDRS=ncadg_udp:192.1.1.1  
export RPC_SUPPORTED_NETADDRS
```

次に、mwa restart server オプションを使用してサーバーを再起動します。

この操作を行っても接続できない場合、エンドポイント マップ (dced/rpcd) に問題がある可能性があります。dced/rpcd を開始する前に、環境変数を設定してみてください。その後、システムを再起動して、IP アドレスの制限を有効にします。

## 安全な通信の設定

Performance Agent は証明書ベースの安全性の高い通信、およびクライアント認証ベースの通信に対応しています。

### 証明書の使用

Performance Agent は、Operations Manager 8.x 環境でのみ、証明書ベースの安全なデータ通信に対応しています。

Operations Manager で安全性の高い通信を設定するには、『HP Operations Manager for UNIX Firewall Concepts and Configuration Guide』を参照してください。

Operations Manager 8.x HTTPS エージェントの詳細は、『HP Operations Manager HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide』を参照してください。

Operations Manager 8.x 環境ですでに HTTPS 通信を設定している場合は、Performance Agent と Performance Manager 5.0 の間の安全な通信を設定するために、以下の変更を行います。



Reporter および Performance Manager 4.x は証明書ベースの安全性の高い通信には対応していません。

Performance Agent システムでは、coda に関して、SSL\_SECURITY に REMOTE を設定します。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda -set SSL_SECURITY REMOTE
ovcodautil -config
```

### クライアント認証の使用

オプションとして、Performance Manger または Reporter などの製品からのクライアント接続の認証を、Performance Agent で実行することができます。この認証機能を利用することで、特定の Performance Agent インスタンスについて、そのインスタンスへのクライアント接続を許可するホストを指定できます。

クライアント認証機能は、あらゆるバージョンの Performance Manager および Reporter クライアントからの接続を有効または無効にします。この機能を利用するにあたって、クライアント ソフトウェアを更新する必要はありません。

認証プロセスは、認証されるクライアントに透過的に行われるため、クライアント接続は表面上、Performance Agent の過去のバージョンを使用していたときと同じように処理されます。未認証のクライアントには、サービス拒否を示すメッセージが表示されます。

## authip ファイルによる認証の有効化

authip というファイルが存在する場合、認証は有効になります。HTTP 通信が有効なシステムでは、authip ファイルは /var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリにあります。DCE 通信が有効なシステムでは、authip ファイルは /var/opt/perf/ ディレクトリにあります。authip ファイルにはホストのリストが含まれ、そのホストからのクライアント接続が許可されます。

- authip ファイルがデフォルトのディレクトリに存在する場合、クライアント接続が許可されるホストはこのファイルの内容によって決定されます。Performance Agent インスタンスと同じホストで実行されているクライアントは自動的に認証されるため、エントリを必要としません。長さがゼロの authip ファイルは、Performance Agent ホストで実行されているクライアントのみが接続できることを意味します。
- authip ファイルがデフォルトのディレクトリに存在しない場合は、認証が行われず、Performance Agent の過去のバージョンと同様に、すべてのクライアントに接続が許可されます。

authip ファイルは、クライアントが Performance Agent によるサービスを要求して登録を試みるたびに照会されます。authip ファイルに変更が加えられた場合、変更内容を有効にするために Performance Agent を再起動する必要はありません。

ただし、認証が不適格となるように後からサーバーの authip ファイルに変更を加えた場合でも、すでに認証が完了している既存のクライアント セッションは、Performance Agent による再認証を要求される処理をクライアントが行うまで、現行の接続を維持できます。このため、Performance Agent の authip ファイルに加えられた変更に関係なく、認証が完了している Performance Manager 接続は Performance Agent ホストへのデータ ソースが閉じられるまでアクセスを許可されます。その後、データ ソースを開き直すと、authip ファイルの再読み込みが行われるため、接続は拒否されます。

アラーム用の Performance Manager 登録では、クライアントがデータ ソースを削除するまで ( 閉じるだけでは不十分 ) 承認済みクライアントはアラームを受け取り続けます。サーバーのアラーム ジェネレータ データベースからのクライアントの削除を Performance Agent 側から強制的に行うときは、次のコマンドを使用します。

```
agsysdb -delpv <host>
```

Performance Agent クライアント認証機能では、使用するネットワークで authip ファイルに含まれるクライアント エントリを解決できることが必要です。エントリの性質によっては、DNS、NIS、または /etc/hosts ファイルなどによって提供されるネーム サービスが必要になる場合があります。

Performance Agent ホストから各 authip エントリへ「ping」が成功すれば、クライアント エントリは解決されています。また、ファイアウォールを介したクライアント認証も同様に、authip ファイル中のクライアント エントリが Performance Agent ホストからの ping に応答する場合に機能します。

## authip ファイルのフォーマット

authip ファイルは次のフォーマットに一致する必要があります。

- 1行あたり1つのクライアント ホストをリストする
- クライアント エントリには、次のフォーマットのうち1つ(任意)を使用する
  - 完全修飾ドメイン名
  - エイリアス (alias)
  - IP アドレス (ドットで4つに区切った IPv4 アドレス)
- クライアント エントリにはスペースは使用できない
- 行の始めが「#」のラインは、コメントとして無視される
- ブランクあるいは長さがゼロの行は無視される
- IP アドレスは 0 から始めない。たとえば、23.10.10.10 の IP アドレスを、023.10.10.10 と表すことはできません。

/etc/hosts エントリは次のようになります。

```
123.456.789.1  testbox  testbox.group1.thecompany.com
```

「testbox」ホストからのクライアントは、authip ファイル内の次のエントリのいずれによっても接続可能です。

```
#===== authip ファイル エントリの例 =====  
#  
# IP アドレスを使用  
123.456.789.1  
  
#  
# エイリアスを使用  
testbox  
  
#  
# 完全修飾ドメイン名を使用  
testbox.group1.thecompany.com  
  
#===== authip ファイル エントリの例の終わり =====
```

## データ ソースの設定

Performance Agent は、coda デーモンまたはレポジトリ サーバーのセットを使用して、事前に収集したデータをアラーム ジェネレータや Performance Manager 分析製品に送信します。coda デーモンでは HTTP データ通信メカニズムが使用され、レポジトリ サーバーでは DCE メカニズムが用いられます。HTTP および DCE データ通信メカニズムの両方が有効になっていると、coda デーモンとレポジトリ サーバーのセットの両方が Performance Agent により使用されます。各データソースには、1つのログファイルセットが含まれます。

coda がアクセスするデータソースのリストは、`/var/opt/OV/conf/perf/`ディレクトリにある `datasources` 設定ファイルで管理されます。レポジトリサーバーがアクセスするデータソースのリストは、`/var/opt/perf/` ディレクトリにある `perflbd.rc` ファイルで管理されます。`perflbd.rc` ファイルは、`datasources` ファイルへのシンボリックリンクとして管理されます。

`scopeux` ログファイルや DSI ログファイルなどの特定のデータソースに対してそれぞれのレポジトリサーバーがあります。インストール後、初めて Performance Agent を実行する場合、デフォルトのデータソースである SCOPE が事前に設定されていて、`scopeux` ログファイルセットが提供されています。

他のデータソースを追加する場合は、`datasources` ファイルでそれらを設定することができます。Performance Manager からの Performance Agent または DSI ログファイル データを表示したり、またはログファイルのアラームを処理したりする必要がない場合は、`datasources` ファイルを編集して、データソースやログファイルセットへのパスを削除することができます。coda デーモンまたはレポジトリサーバーを再起動する際に、`datasources` ファイルが読み込まれ、検出した各データソース用の分析ツールへの通信リンクを経由して、データを利用することができるようになります。coda またはレポジトリサーバーを再起動するには、45 ページの「データソース設定ファイルのフォーマット」を参照してください。

データが不要になったときには、ログファイルセットを削除することもできます。`datasources` から、データソースは削除せずに、ログファイルセットを削除すると、coda またはレポジトリサーバーにより、そのデータソースはスキップ (対象外に) されます。

DSI データのログファイルセットへの記録を停止する際に、coda デーモンまたはレポジトリサーバーを開いたままにしておくことが可能です。これにより、Performance Manager で履歴データを表示することができます。この場合は、`datasources` ファイルからデータソースを削除せずに、`dsilog` プロセスを停止します。

## データ ソース設定ファイルのフォーマット

`datasources` 設定ファイルの各エントリは、1つの ログ ファイル セットで構成されるデータ ソースを示します。エントリは、データ ソースの名前とパスを示します。このフィールドでは、ログ ファイルのパス名以外は、大文字小文字の区別はありません。構文は次のようになります。

**datasource=datasource\_name logfile=logfile\_set**

- **datasource** はキーワードです。**datasource\_name** はデータ ソースを識別するための名称です。たとえば、データ ソース名はアラーム定義や分析ソフトウェアで使用されます。また、データ ソース名は固有の名前である必要があります。これらの名前は、大文字に変換されます。さらに、データ ソース名は最大 64 文字まで指定できます。
- **logfile** はキーワードで、**logfile\_set** は DSI ログ ファイル (dsilog プロセスにより作成され、`.log` で終わるファイル) を識別する完全修飾名で、大文字小文字の区別があります。

次に `datasources` ファイルのデータ ソース エントリを 2 例示します。

```
datasource=SCOPE logfile=/var/opt/perf/datafiles/logglob
datasource=ASTEX logfile=/tmp/dsidemo/log/astex/ASTEX_SDL
```

`datasources` のアップデート後に、次のコマンドを実行し、`coda` を介して新しいデータ ソースを利用できるようにします。

**/usr/lpp/perf/bin/ovpa restart server**

また、レポジトリ サーバーを実行している場合は、次のコマンドを実行し、レポジトリ サーバー (`rep_server`) を介して新しいデータ ソースを利用できるようにします。

**/opt/perf/bin/mwa restart server**

レポジトリ サーバーのプロセスを停止すると、**Performance Manager** との接続がすべて切断されてしまうことに注意してください。たとえば、データ ソースでグラフを描いていて、さらに別のグラフを描く場合には、レポジトリ サーバーが再起動されたときに、**Performance Manager** のデータ ソースを再選択して、接続を確立しなおす必要があります。

`/var/opt/OV/log/coda.txt` ファイルの内容を見て、`coda` デーモンがアクティブになったことを確認するか、またはエラー メッセージを参照します。

DSI データ ソース設定の特殊な例については、『**HP Performance Agent for UNIX データ ソース統合ガイド**』の第 4 章「データ ソースの設定」を参照してください。

## parm ファイルの設定

parm ファイルはテキスト ファイルです。ログ ファイルの最大サイズ、対象プロセスのしきい値の定義、およびアプリケーション定義といった scopeux データコレクタの設定を指定します。ファイル中のコメントで、各種設定の概要を確認することができます。

Performance Agent では、parm ファイルは /opt/perf/newconfig/ ディレクトリに存在します。システムに /var/opt/perf/parm ファイルがない場合、インストール中に /var/opt/perf/ ディレクトリにコピーされます。parm ファイルとそのパラメータに関する詳細は、『HP Performance Agent for UNIX ユーザーマニュアル』の第 2 章、「parm ファイル」セクションを参照してください。

## アラームの定義

パフォーマンスをモニタするためにアラームを使用する場合、Performance Agent の `alarmdef` ファイルにあるアラーム定義セット内でアラーム発生条件を指定します。Performance Agent を最初にインストールしたときに、`alarmdef` ファイルにデフォルトのアラーム定義セットが含まれています。このデフォルトの定義を使用するか、または必要な場合はカスタマイズすることが可能です。

アラームの定義についての詳細は、『HP Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』の第7章「パフォーマンス アラーム」を参照してください。第7章では、アラーム定義の構文、アラームの機能、パフォーマンスをモニタするためのアラームの使用方法について説明しています。

## 母国語のサポート

HP-UX システムで実行される Performance Agent の extract プログラムと utility プログラムは、母国語のサポート (NLS) を行います。

HP-UX オペレーティング システムの NLS 機能を使用している場合、extract プログラムおよび utility プログラムは他の母国語の日付と時間の形式をサポートすることができます。

母国語がシステムにインストールされていて、選択されている場合、extract プログラムと utility プログラムは次の調整を行います。

- 日付と時間は、NLS パッケージ内で指定された言語で入力され、表示されます。日付や時間が認識できないフォーマットで入力された場合、プログラムは正しいフォーマットの例を示してユーザーに入力を促します。
- help コマンドのテキストは、extract.help および utility.help から取得されます。これらのファイルは、システムの言語として *\$LANG* が指定されている /opt/perf/help/ovpa/*\$LANG* ディレクトリに配置されています。デフォルトの言語は「C」です。help カタログが *\$LANG* ディレクトリで見つからない場合、デフォルトの help ファイルが使用されます。

## ドキュメントの表示と印刷

Performance Agent ソフトウェアには、表示および印刷可能なファイルフォーマットで、標準の Performance Agent ドキュメント一式が付属しています。Adobe Acrobat フォーマット (\*.pdf) のドキュメントはオンラインで表示され、必要な場合は印刷できます。ASCII テキスト (\*.txt) のドキュメントは印刷が可能です。vi などの UNIX テキスト エディタを使用すると、画面上でテキスト ファイルを表示できます。次の表で、ドキュメント、使用されているファイル名、およびオンラインのパスを示します。

表 2 Performance Agent ドキュメント一覧

ドキュメント	ファイル名	UNIX パス
HP Performance Agent for HP-UX インストール、設定ガイド	ovpainst.pdf	/opt/perf/paperdocs/ovpa/C/
HP Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル	ovpausers.pdf	/opt/perf/paperdocs/ovpa/C/
HP Performance Agent for UNIX データ ソース統合ガイド	ovpadsi.pdf	/opt/perf/paperdocs/ovpa/C/
HP Performance Agent for UNIX および GlancePlus トランザクション 追跡	tyt.pdf	/opt/perf/paperdocs/arm/C/
アプリケーション応答測定 API ガイド	arm2api.pdf	/opt/perf/paperdocs/arm/C/
HP Performance Agent HP-UX Metric Definitions	methpux.txt	/opt/perf/paperdocs/ovpa/C/
HP Performance Agent metrics list by Data Class for all operating systems	mettable.txt	/opt/perf/paperdocs/ovpa/C/

## Web 上でのドキュメントの参照

ここにリストしているドキュメントは、以下の HP ソフトウェア マニュアルの Web サイトでも参照できます。

**[http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc\\_serv](http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv)**

製品リスト ボックスから **Performance Agent** を選択し、リリース バージョン、OS、およびマニュアルのタイトルを選択します。**[Open]** をクリックして、オンラインでドキュメントを表示します。または **[Download]** をクリックして、ご使用のコンピュータにファイルを配置します。

## Adobe Acrobat ファイル

Adobe Acrobat ファイルは、Acrobat 7.0 で作成されています。表示する場合は、Adobe Acrobat Reader バージョン 4.0 以降を使用してください。Web ブラウザに Acrobat Reader がインストールされていない場合は、Adobe の Web サイトからダウンロードできます。

**<http://www.adobe.com>**

Acrobat Reader でドキュメントを表示している間は、1 ページ、複数ページ、または全ページ分のドキュメントを印刷できます。

HP-UX では、Adobe Acrobat Reader がシステムにインストールされていれば、`acroread` コマンドを使用して .PDF ファイルを参照することができます。/path/の部分に `acroread` コマンドの場所を指定して、次のようにコマンドを入力してください。

```
/path/acroread filename.pdf
```

## ASCII テキスト ファイル

.txt ファイルを印刷するには、次のように入力します。

```
lp -dprintername filename
```

次に例を示します。

```
lp -dros1234 Metrics.txt
```

## 3 coda の設定

### はじめに

coda は、HP Operations Agent 用の軽量なデータ収集エージェントです。coda は Performance Agent のサブセットで、Performance Agent の通信経路として動作します。すべての設定パラメータは、coda 名前空間および coda.comm 名前空間内でコマンド ovconfchg を使用して設定します。

### coda 名前空間

次の表で、coda 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

coda 名前空間のパラメータ	説明	デフォルト値
DISABLE_PROSPECTOR	HP Operations Agent と Performance Agent が共存する環境において、coda データ ソースからのデータ収集を無効にするために使用します。	false
ENABLE_PROSPECTOR	Performance Agent のスタンドアロン環境において、coda データ ソースからのデータ収集を有効にするために使用します。	false
SSL_SECURITY	coda からの安全性の高い通信を有効にする場合に使用します。	NONE
RESPONSE_SIZE_LIMIT	coda によって割り当てられるメモリの最大容量を指定するために使用します。	104857600 (100 メガバイト)

## DISABLE\_PROSPECTOR

このオプションでは、HP Operations Agent および Performance Agent の両方がインストールされている場合の、coda を介したデータ収集について設定します。デフォルト値は false です。フォーマットは次のようになります。

**ovconfchg -namespace coda -set DISABLE\_PROSPECTOR < 値 >**

- true: coda は、coda データ ソース用のデータを収集しません。
- false: coda は、coda データ ソース用のデータを収集します。

## ENABLE\_PROSPECTOR

このオプションでは、Performance Agent のみがインストールされている場合の、coda を介したデータ収集について設定します。デフォルト値は false です。このパラメータは、HP Operations Agent および Performance Agent の両方がインストールされている場合には無視されます。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda -set ENABLE_PROSPECTOR < 値 >
```

- true: coda は、coda データ ソース用のデータを収集します。
- false: coda は、coda データ ソース用のデータを収集しません。



coda の Prospector が有効かどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
ovcodautl -dumpds coda
```

## SSL\_SECURITY

このオプションは、coda を介した安全性の高い通信を有効にします。デフォルト値は NONE です。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda -set SSL_SECURITY < 値 >
```

- NONE: coda は、ローカル クライアントまたはリモート クライアントに対して SSL 接続を要求しません。
- REMOTE: coda は、すべてのリモート接続に対して SSL を要求します。
- ALL: coda は、すべての接続 ( ローカルおよびリモート ) に対して SSL を要求します。



このパラメータは、システムに証明書が存在する場合にのみ使用します。証明書は、HP Operations Agent 8.x がシステムにインストールされている場合にのみインストールされます。

## RESPONSE\_SIZE\_LIMIT

このオプションは、`coda` デーモンによってクエリ応答に割り当てられるメモリの最大容量を指定します。デフォルト値は、104857600 (100 メガバイト) です。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda -set RESPONSE_SIZE_LIMIT <値>
```



指定した制限を超えた場合は、次のエラーメッセージが表示されます。

```
Response exceeds memory limits, use several smaller requests
```

## coda 通信名前空間 (coda.comm)

次の表で、`coda.comm` 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

<b>coda.comm 名前空間の パラメータ</b>	<b>説明</b>	<b>デフォルト値</b>
<code>SERVER_PORT</code>	ポートを設定するために使用します。	0
<code>SERVER_BIND_ADDR</code>	サーバー ポートのバインド アドレスを指定するために使用します。	<code>INADDR_ANY</code>
<code>LOG_SERVER_ACCESS</code>	<code>true</code> に設定されている場合、 <code>coda</code> はサーバーへのアクセスをすべて記録します。記録される情報には、送信側 IP アドレス、要求された HTTP アドレス、要求された HTTP メソッド、および応答ステータスが含まれます。	<code>false</code>

## SERVER\_PORT

coda が使用するデフォルト ポートを設定できます。ポートのデフォルト値は 0 です。ポートが 0 に設定されている場合、オペレーティングシステムによって、空いている最初のポート番号が割り当てられます。ovconfchg ツールを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。以下のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set SERVER_PORT <ポート番号>
```

## SERVER\_BIND\_ADDR

このオプションでは、サーバー ポートのバインド アドレスを指定します。この値が localhost に設定されると、coda サーバーへの通信はすべて ovbbccb を通して行われます。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR <バインドアドレス>
```

## LOG\_SERVER\_ACCESS

このオプションを使用すると、サーバーへのアクセスを有効 / 無効にできます。このオプションが true に設定されている場合、coda はサーバーへのアクセスをすべて記録します。記録される情報には、送信側 IP アドレス、要求された HTTP アドレス、要求された HTTP メソッドおよび応答ステータスが含まれます。通常、この値は変更しません。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set LOG_SERVER_ACCESS <値>
```

## 単一ポート通信

これは、Performance Agent 4.70 のデフォルトの通信方式です。coda で単一ポート通信を有効にする場合、次のオプションを使用します。

```
ovconfchg -ns coda -set SSL_SECURITY REMOTE/ALL
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

## 複数ポート通信

coda で複数ポート通信を有効にする場合、次のオプションを使用します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR ""
```

coda で単一ポート通信と複数ポート通信のどちらが有効かを確認するには2つの方法があります。

- 1 ポートが単一ポート通信または複数ポート通信のどちらで使用されているかを、ローカルホストマシンから確認するには、次のオプションを使用します。

### bbcutil -reg

単一ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
BasePath=/Hewlett-Packard/OpenView/Coda/
Protocol=HTTPS
BindAddress=localhost
Port=59814
Authentication=NONE
```

返された値が localhost または 127.0.0.1 の場合は、単一ポート通信です。

複数ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
BasePath=/Hewlett-Packard/OpenView/Coda/
Protocol=HTTPS
BindAddress=ANY
Port=381
Authentication=NONE
```

返された値が localhost 以外の場合は、複数ポート通信です。



**bbcutil** は、<インストールディレクトリ>/binディレクトリにあります。

- 2 ポートが単一ポート通信または複数ポート通信のどちらで使用されているかを、ローカル ホスト以外のシステムから確認するには、次のオプションを使用します。

```
ovcodauti1 -n <ホスト名> -ping
```

次に例を示します。

```
ovcodauti1 -n ovphpt4 -ping
```

単一ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
Ping of 'OvBbcCb' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
BBC/ping' successful
```

```
Ping of 'Coda' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
Coda/' successful
```

複数ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
ovcodauti1 -n ovphpt4 -ping
```

```
Ping of 'OvBbcCb' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
BBC/ping' successful
```

```
Ping of 'Coda' at: 'http://ovphpt4:62581/Hewlett-Packard/OpenView/  
Coda/' successful
```

複数ポート通信の場合は、2つの出力でポート番号が異なります。



coda クライアントの場合、coda.comm 名前空間のすべてのパラメータは、bbc.http 名前空間に定義されているパラメータより優先されます。

## 通信ブローカー名前空間 (bbc.cb)

次の表で、bbc.cb 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.cb 名前空間の パラメータ	説明	デフォルト値
SERVER_PORT	ポートを設定するために使用します。	383
SERVER_BIND_ADDR	サーバー ポートのバインド アドレスを指定するために使用します。	INADDR_ANY

### SERVER\_PORT

通信ブローカーが使用するデフォルト ポートを設定できます。ポートのデフォルト値は 383 です。ovconfchg ツールを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb -set SERVER_PORT <ポート番号>
```



通信ブローカーポート 名前空間 (bbc.cb.ports) にすでにポート が定義されている場合は、そのポート がデフォルト ポートとして割り当てられ、SERVER\_PORT の値が無効となります。

### SERVER\_BIND\_ADDR

このオプションでは、サーバー ポートのバインド アドレスを指定します。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb -set SERVER_BIND_ADDR <バインドアドレス>
```

## 通信ブローカー ポート名前空間 (bbc.cb.ports)

次の表で、bbc.cb.ports 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.cb.ports 名前空間 のパラメータ	説明	デフォルト値
PORTS	<p>ネットワーク内で、ホスト上のアプリケーションが通信する可能性があるすべての通信ブローカー用のポートのリストを定義するために使用します。</p> <p>クライアント アプリケーションはこのリストを対象ポートとして使用し、ネットワーク内の通信ブローカーと通信を行います。このポート設定内のエントリとホスト名が一致する場合は、ローカルの通信ブローカー ポートが通信用ポートとして設定されます。</p>	ポートの値のデフォルト設定はありません。

## PORTS

この設定パラメータはすべてのノードで同じ値に設定します。特定のホスト上の通信ブローカーのポート番号を変更する場合は、パラメータにホスト名を追加します。

次に例を示します。

```
name.hp.com:8000
```

アスタリスクをワイルドカードとして使用すると、ネットワーク全体を指定できます。

```
*.hp.com:8001
```

ホスト名のリスト内のエントリを区切るには、コンマまたはセミコロンを使用します。

次に例を示します。

```
name.hp.com:8000, *.hp.com:8001
```

この例では、末尾が `hp.com` のホスト名の BBC 通信ブローカーがポート 8001 を使用するよう設定しています。ただし、ホスト名が「name」の場合はポート 8000 を使用します。その他の場合はすべてデフォルトのポート 383 を使用します。

また、IP アドレスとアスタリスク (\*) を使用してホストを指定することもできます。

次に例を示します。

```
15.0.0.1:8002, 15.*.*.*:8003
```

ポートを設定するには、次のコマンドを実行します。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb.ports -set PORTS <ポート番号>
```

## HTTP 名前空間 (bbc.http)

次の表で、bbc.http 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.http 名前空間の パラメータ	説明	デフォルト値
RESPONSE_TIMEOUT	応答を待機する最大秒数を指定するために使用します。	300
CLIENT_PORT	クライアント要求のバインドポートを指定します。	0
PROXY	指定したホスト名に使用するプロキシおよびポートを指定します。	プロキシの値のデフォルト設定はありません。

### RESPONSE\_TIMEOUT

このオプションは、応答を待機する最大秒数を指定するために使用します。デフォルト値は 300 です。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.http -set RESPONSE_TIMEOUT <値>
```

### CLIENT\_PORT

このオプションでは、クライアント要求のバインドポートを指定します。デフォルト値はポート 0 です。オペレーティングシステムによって、空いている最初のポートが割り当てられます。ローカルホストへの要求の場合、このパラメータは無視されます。



Windows システムでポートを再利用する際、すぐにはポートが開放されないため、このパラメータには大きめの値を設定します。

## PROXY

指定したホスト名に使用するプロキシおよびポートを指定します。

フォーマットは次のようになります。

**proxy:port+(a)-(b);proxy2:port2+(a)-(b); ...;**

この例で、変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名をコンマまたはセミコロンで区切った形式のリストです。

a: プロキシを使用します

b: プロキシを使用しません

最初に適合したプロキシが選択されます。

また、ホスト名の代わりに IP アドレスを使用できます。たとえば、`15.*.*.*` も、正しい数のピリオドおよびコロンが指定されているため、有効となります。

# 用語集

この用語集は、Performance Agent に関連した用語の一部をアルファベット順、五十音順に並べてあります。

## alarmdef ファイル

アラームの状態を特定するアラーム定義を含むファイルです。

## coda デーモン

収集したデータをアラーム ジェネレータや scopeux ログ ファイルまたは DSI ログ ファイルを含むデータ ソースの分析製品に提供するデーモンです。coda は detasources 設定ファイルにリストされているデータ ソースから、データを読み込みます。

## datasources ファイル

/var/opt/OV/conf/perf/ ディレクトリにある設定ファイルです。ファイル内の各エントリは単一のログ ファイル セットから成る scopeux または DSI データ ソースを示しています。「**perflbd.rc**」、「**coda**」、および「**データ ソース**」も参照してください。

## default.txt

HP ソフトウェア アプリケーションで通信パラメータをカスタマイズするために使用する通信設定ファイルです。

## DSI

「**データ ソース統合 (DSI)**」を参照してください。

## DSI ログ ファイル

Performance Agent の DSI プログラムによって作成される、自己記述型のデータを含むログ ファイルです。

## **extract**

Performance Agent のプログラムの 1 つで、生のログ ファイルまたは事前に抽出したログ ファイルからデータを抽出 (コピー) し、抽出ログ ファイルに書き込みます。また、分析プログラムで使用するために、データを書き出すことができます。

## **GlancePlus**

GlancePlus (Glance) は、ユーザー端末やワークステーションに現在のパフォーマンスデータを直接表示するオンラインの診断ツールです。システムのパフォーマンス障害が発生した場合は、障害の識別と解決の支援ツールとして機能します。

## **HP Performance Manager**

マルチベンダー分散型ネットワーク システムの統合型パフォーマンス管理を提供します。1 台のワークステーションを使用して、数十から数千のノード サイズに及ぶネットワーク上の環境パフォーマンスをモニタします。

## **logappl**

ユーザーが定義した各アプリケーションのプロセスの測定値を含む生ログ ファイルです。

## **logdev**

ディスクなどの個別デバイスのパフォーマンスの測定値を含む生ログ ファイルです。

## **logglob**

システム全体の作業負荷、つまりグローバルな作業負荷の測定値を含む生ログ ファイルです。

## **logindx**

他のログ ファイルに含まれるデータにアクセスする際に必要となる追加情報を含む生ログ ファイルです。

## **logproc**

選択された「対象プロセス」の測定値を含む生ログ ファイルです。プロセスが初めて作成されたとき、プロセスが終了したとき、および CPU 使用量、ディスク使用量、応答時間などに対してユーザーが定義したしきい値を超えたときに、プロセスは「対象プロセス」となります。

## logtran

トランザクションデータの測定値を含む生ログファイルです。

## midaemon

Performance Agent のプログラムの 1 つで、オペレーティングシステムのカーネルから取得するトレースデータを収集し、カウントして、共有メモリセグメントのカウンタに保存します。このデータは、scopeux のパフォーマンスデータのメインソースです。

## ovbbccb

ovcd で制御される通信をベースとした HTTP(S) 用の Operations Manager 通信ブローカーです。「**coda**」、および「**ovc**」も参照してください。

## ovc

Operations Manager の制御プロセスおよび監視プロセスです。スタンドアロン Performance Agent のインストールでは、ovcd によって coda および ovbbccb が監視および制御されます。Operations Manager for UNIX 8.x エージェントがインストールされたシステムに Performance Agent をインストールする場合も、ovcd によって Operations Manager for UNIX 8.x プロセスが監視および制御されます。「**coda**」、および「**ovbbccb**」も参照してください。

## ovpa スクリプト

scopeux データコレクタ、アラームジェネレータ、ttd、midaemon、および coda などの Performance Agent のプロセスを開始、終了、再開するオプションを含んだ Performance Agent スクリプトです。ovpa の man ページも参照してください。

## parm ファイル

データ収集方法をカスタマイズするために、scopeux により使用されるパラメータを含む Performance Agent のファイルです。

## perflbd.rc

/var/opt/perf/ ディレクトリにある設定ファイルです。このファイルは、datasources ファイルへのシンボリックリンクとして管理されます。「**datasources ファイル**」も参照してください。

## **perfstat**

システムにインストールされたパフォーマンス プロセスの全ステータスを表示するプログラムです。

## **PerfView**

「**HP Performance Manager**」を参照してください。

## **run ファイル**

scopeux プロセスが動作中であることを示すために、scopeux コレクタによって作成されます。run ファイルを削除すると scopeux は終了します。

## **scopeux**

パフォーマンス データを収集した後、分析または記録用として生ログ ファイルにデータを書き込む (記録する) Performance Agent データ収集プログラムです。「**生ログ ファイル**」も参照してください。

## **scopeux ログ ファイル**

「**生ログ ファイル**」を参照してください。

## **status.scope ファイル**

ステータス、データの不整合、およびエラーを記録するために、**scopeux** コレクタによって作成されます。

## **ttd.conf**

トランザクション名、パフォーマンス分布範囲、サービス レベルの目標など、各トランザクションおよび追跡される情報を定義するトランザクション設定ファイルです。

## **utility**

Performance Agent のプログラムの 1 つで、生ログ ファイルと抽出ログ ファイルのオープン、リサイズ (サイズ変更)、スキャン、およびレポート作成を可能にします。このプログラムを使用すると、parm ファイルと alarmdef ファイルの構文が確認でき、過去のログ ファイル データのアラーム情報が取得できます。

## アプリケーション

関連のプロセスまたはプログラム ファイルのユーザー定義グループです。アプリケーションは、パフォーマンス ソフトウェアがパフォーマンス メトリックを収集し、プロセスおよびプログラムのアクティビティを一括して報告できるように定義されます。

## アプリケーション ログ ファイル

「logappl」を参照してください。

## アラーム

パフォーマンスがユーザー指定のアラームの基準に一致した時間、またはその基準を超えた時間を意味します。アラーム情報は、Performance Manager などの分析システムや Operations Manager に送信されます。utility プログラムを使用すると、過去のデータ ログ ファイルでアラームを識別できます。

## アラーム ジェネレータ

アラーム情報の通信を処理します。これは、perfalarm および agdb データベースで構成されます。agdb データベースは、アラームが送信される Performance Manager 分析 ノード (存在する場合) のリスト、およびアラーム情報が送信される時間と場所を定義するために必要な各種の on または off フラグで構成されます。

## グローバル

システム全体を意味する修飾子です。

## グローバル ログ ファイル

「logglob」を参照してください。

## システム識別番号

システムを識別する文字列です。デフォルトは `uname -n` で返されるホスト名です。

## 対象プロセス

プロセスが初めて作成されたとき、プロセスが終了したとき、および CPU 使用量、ディスク使用量、応答時間などに対してユーザーが定義したしきい値を超えたときに、プロセスは「対象プロセス」となります。

## 抽出ログ ファイル

extract プログラムによって作成されるログ ファイルです。ユーザーが選択したデータの範囲とデータ型を含みます。抽出ログ ファイルは、ワークステーションの分析ツールである Performance Manager により、最適なアクセスが可能になるようにフォーマットされています。このファイルのフォーマットは、extract プログラムと utility プログラムへの入力に最適であり、パフォーマンス データのアーカイブにも適しています。

## データ ソース

単一の scopeux または DSI ログ ファイル セット内の 1 つ以上のデータ クラスで構成されます。たとえば、Performance Agent の SCOPE データ ソースは、グローバルなデータから成る scopeux ログ ファイル セットです。「**datasources ファイル**」も参照してください。

## データ ソース統合 (DSI)

Performance Agent がアプリケーション、データベース、ネットワーク、他のオペレーティング システムなどの外部ソースからデータを受信し、記録して、アラームを検出することを可能にする技術です。

## デバイス

システムに接続されている入出力デバイスです。ディスクドライブ、テープドライブ、DVD-ROM ドライブ、プリンタ、ユーザー端末などは共通デバイスです。

## デバイス ログ ファイル

「logdev」を参照してください。

## トランザクション追跡

Performance Agent で使用されている技術で、情報技術 (IT) のリソース マネージャが、ビジネス アプリケーション トランザクションのエンドツーエンドの応答時間を測定できるようにします。

## トランザクション ログ ファイル

「logtran」を参照してください。

## 生ログ ファイル

scopeux が収集するシステム データの要約された測定値を含むファイルです。「logappl」、「logproc」、「logdev」、「logtran」、および「logindx」を参照してください。

## プロセス

プログラム ファイルを実行します。対話型のユーザー (normal、nice または realtime のいずれかの優先順位で実行中のプロセス ) またはオペレーティング システムのプロセスを示します。

## プロセス ログ ファイル

「logproc」を参照してください。

## リアルタイム

イベントが発生する実際の時間です。

## リサイズ

utility プログラムの resize コマンドを使用して、ログ ファイル全体のサイズを変更します。

## レポジトリ サーバー

アラーム ジェネレータや Performance Manager 分析製品にデータを送信するサーバーです。perflbd.rc 設定ファイル内の各データ ソースに対して、1つのレポジトリ サーバーがあります。「データ ソース」も参照してください。

## ログ ファイル セット

単一のソースから収集されたデータから成るファイルの集まりです。



# 索引

## A

alarmdef ファイル , 47  
authip ファイル , 41  
    フォーマット , 42  
    例 , 43

## C

coda.log ファイル , 45

## D

DSI データ ソース , 44

## E

extract プログラム , 45

## M

midaemon, 11  
MWA\_START\_COMMAND 変数 , 24  
MWA\_START 変数 , 24  
mwa スクリプト  
    mwa restart, 22  
    mwa restart alarm, 23  
    mwa restart server, 22  
    mwa start, 21  
    mwa stop, 22

## O

Operations Manager  
    Performance Agent のインストールに使用 ,  
    14  
ovpa restart スクリプト , 21  
ovpa スクリプト , 20  
    ovpa start, 19

## P

parm ファイル , 46  
perfalarm, 21  
perflbd.rc ファイル , 44  
Performance Agent  
    アップグレードの手順 , 11  
    アラーム , 47  
    インストールの手順 , 11  
    起動時 , 17  
    再起動 , 20, 21  
    削除 , 16  
    終了と再起動 , 20  
    ステータス ファイル , 24  
    ディスク スペース要件 , 10  
    データ収集 , 46  
    ドキュメント一覧 , 49  
    リモート ドライブへのファイルのインス  
    トール , 14  
Performance Agent の削除 , 16

## Performance Manager

Performance Manager C.03.00 以降と  
Performance Agent のファイアウォール  
通信の設定, 34

Performance Agent でのファイアウォール  
設定, 34

perfstat コマンド, 11

## R

### Reporter

Reporter を参照, 37  
ファイアウォール設定, 37

RPC\_SUPPORTED\_NETADDRS 環境変数, 39

RPC アドレスの制限, 39

## S

### scopeux

データ ソース, 44

SCOPE デフォルト データ ソース, 44

## T

ttd, 12

## あ

アップグレードの手順, 11

アラーム, 47

アラームの定義, 47

## い

印刷可能なファイル, 49

インストールの手順, 11

DVD-ROM からのインストール, 12

Operations Manager を使用する Performance  
Agent のインストール, 14

リモートドライブへのファイルのインス  
トール, 14

インストール要件, 9

ディスク スペース, 10

ハードウェア, 9

## か

環境変数, 24

## き

### 起動

mwa の使用, 21

Performance Agent, 17, 18

Performance Agent の使用, 19

## く

クライアント認証, 41

## さ

### 再起動

Performance Agent, 20

### 参照

UNIX での PDF ドキュメント, 50

Web で参照, 50

## し

### 終了

Performance Agent, 20

インストール前にプロセスを終了, 11

## す

### スクリプト

ovpa restart alarm, 21

ovpa stop, 20

ステータス ファイル , 24  
  coda.txt, 25  
  status.alarmgen, 25  
  status.mi, 25  
  status.perfalarm, 25  
  status.perflbd, 25  
  status.rep\_server, 25  
  status.scope, 25  
  status.ttd, 25

## せ

### 設定

parm ファイル , 46  
Performance Manager C.03.00 以降と  
  Performance Agent のファイアウォール  
  通信 , 34  
Performance Manager と Performance Agent  
  のファイアウォール通信 , 34  
Reporter と Performance Agent のファイア  
  ウォール通信 , 37  
データ ソース , 44

## そ

ソフトウェア要件 , 9

## て

ディスク スペース要件 , 10  
ディレクトリのサンプル  
  README, 25  
データ ソース  
  DSI, 44  
  SCOPE, 44  
  scopeux, 44  
  削除 , 44  
  設定 , 44  
データ ソースの削除 , 44

## と

### ドキュメント

Performance Agent ドキュメント一覧 , 49  
UNIX での PDF ファイルの参照 , 50  
Web に掲載されているドキュメント , 50

ドキュメントの印刷 , 49

## は

ハードウェア要件 , 9

## ふ

ファイアウォール , 33  
  Performance Agent 通信設定の概要 , 27  
  Performance Manager C.03.00 以降を使用し  
  た設定 , 34  
  Reporter A.02.00 以降を使用した設定 , 38  
  Reporter と Performance Agent の通信の設  
  定 , 37  
  ファイアウォールを介した通信 , 26, 33  
  複数の IP アドレスを持つシステム , 33  
ファイアウォールを介した通信 , 33

### ファイル

alarmdef, 47  
coda.log, 45  
parm, 46  
perflbd.rc, 44  
status.scope, 24

プロトコルの変更 , 23

## へ

変数 , 24  
  MWA\_START, 24  
  MWA\_START\_COMMAND, 24  
  環境 , 24

## ほ

母国語のサポート , 48

め

メトリックの定義、印刷, 49